

オスカー・ワイルドと「新しい女」の クイアな関係

武田美保子

オスカー・ワイルドの同性愛裁判当時、ワイルドと「新しい女」は、「セクソマニア」、「社会的終末の双子の使徒」などと呼ばれ、「性的無秩序」の時代の代表的表象としてジャーナリズムを賑わした。一対とみなされた両者の関係は、しかしながら、決してジャーナリズムが取り上げてきたような一枚岩ではありえない。とりわけワイルドの「新しい女」に対する反応には、振幅の激しさが目立つ。例えば、『つまらない女』のヘスターや『まじめが肝心』のグェンドレンのような、「新しい女」を思わせるヒロインを劇中に登場させ、彼女らの「新しい女」的側面はしばしば揶揄されているのだが、実はワイルド自身「新しい女」に魅了されていたと考えられるふしもある。近年の研究が明らかにしているように、少なくとも『女の世界』編集を手がけた当時のワイルドは、合理服推進や婦人参政権などについての記事の執筆を、多くのそうそうたるフェミニストに実際に依頼したり、依頼の予定をしていて、かなりまじめに「新しい女」の出現を促そうとしていたようだ (Ellmann 275) ¹。一方、『ドリアン・グレイの肖像』のヘンリー・ウォットン卿のように、彼の作品にはしばしば、きわめて根深い女性蔑視が顔をのぞかせもする。このように、フェミニストにもミソジニストにも見えるワイルドと「新しい女」とは、決して政治的な立場を同じくしていたわけでもないのだが、それでも両者は、性言説および医科学言説という観点からみていくと、やはり紛れもない同時代性を共有している。またそれによって逆に、同時代の言説の産物がいかに異なった表象として散種されるかということも、浮き彫りにされてくる。

ワイルドは雑誌の編集を通じて、女性たちにファッションを広めるだけでなく、政治思想的な啓蒙も目指した。が、実はその啓蒙活動こそが、結果的に「女性空間への男性ホモセクシュアル言説の導入」 (Brake 127) を果すことになる。最新の衣装を紹介する挿絵や演劇空間での衣装などが主流をなすこの雑誌の行間からは、合理服などの男性的衣装を纏った少女のエロティシズムだけでなく、女性的



Orlando

図版1



Children's Dancing-Dresses

図版2

な衣装を纏った青少年のエロティシズムがたちこめる。ときにそこには、女性たちの集まりに、彼女たちとはあまり変わらないが、少しだけ少年の気配を漂わせた若者がさりげなく寄り添っているのだ。それゆえこうしたモノ＝セクシュアルな雰囲気や漂う写真や図版を通して（図版1、2）、女性読者は知らず知らずのうちに、「新しい女」の魅力だけでなく、女性的な衣装を纏った男性の魅力をも体感し、ひいてはそれが、当時の世論の中に男性ホモセクシュアルの言説を散種する一助ともなったのではないと思われる。こうした嗜好は、『ドリアン・グレイの肖像』における、ドリアンのシビル・ヴェインに対する愛着の中にも窺える。彼がシビルを愛するのは、彼女がシェイクスピア劇の中で様々な衣装を身に纏い、時には少女の姿でまた時には少年に身をやつした姿で、その役柄を演じたからに他ならない。当時のシェイクスピア劇がそもそも少年の役者によって演じられたのであればなおさら、役柄から透かし見える少女でもあり少年でもあり、性境界を行き来するその瞬間のシビルに、ドリアンは魅了されたことになる。そのシビルは、結局、彼女が身に帯びていた「非性化された」属性を剥ぎ取られてしまうことによって、彼の愛情を失ってしまうのである。

同じような性境界侵犯の場面には、『サロメ』の中でも遭遇するだろう。劇中、登場人物たちは視線の快楽に呪縛されているようにみえるのだが、彼らの視線のベクトルは、男性から女性へ、という一方通行で終わることは決してない²。ヨカナン美貌をあげつらね、彼を視線の対象として penetrate しようとするサロメの主体的かつ男性的な衝動は、ジェンダー境界を侵犯するとともに、限り無くク

リアな符牒を帯びる。このことは、当初演出としてサロメにホモセクシュアルを含む「緑色」の衣装を着せようとしたというワイルドの意図、さらにはピアズリーの挿絵をめぐるエリオット・ギルバートの解釈とも連動している³。

こうした衣装倒錯的な傾向はこの時代の際立った特徴で、「新しい女」小説と共通のものだ。が、ここでは異装がより明白な意図のもとに、より明白な形で実行されている。例えば、オリーヴ・シュライナーの『アフリカ農場物語』では、ヒロインのリンダルを愛するグレゴリー・ローズは、臨終の床にある彼女のそばにいたいがため、女装して看護婦に身をやつし、彼女に付き添い続ける。一方、『天上のふたご座』でセアラ・グランドは、双子の兄弟を持ち、男性と同じ扱いを望んで男装し、彼のふりすることで友人を致命的なほどに傷つけてしまう、アンジェリカというヒロインを登場させている⁴。

ワイルドと「新しい女」との同時代性を示すもうひとつの側面は、彼らと当時の英国を席卷した進化論や優生学の言説との関わりである。例えば先に挙げた『天上のふたご座』では、19世紀末を特徴づけた病である性病が焦点化されている。この小説のもうひとりのヒロインのエヴァドニは、親友のエディスが放蕩で知られるサー・モズリと結婚しようとするのを止めるが、エディスは夫を教化し清めることができると信じて結婚する。その結果、彼女も生まれた子供も性病をうつされ、結局彼女は錯乱のうちに死ぬ。ここでこの病の兆候が「猿のよう」と描写されるのは、優生学的言説において性病は、人間が進化の過程を逆行し、退化し動物化していく徴候と捉えられたためである。

世紀末の優生学をめぐるこうした医科学言説は、当然のことながら「新しい女」をさらに巻き込み、「科学的考察」と手をたずさえて、女性像の固定化や性差を含む性的政策決定を正当化するために使われる。たとえば、女性の子供を産む機能を発達させるためにエネルギーが必要であるので、少女の思春期における勉強は、その妨げになるために好ましくないとされるなど、その言説は、女性の高等教育に反対するための科学的根拠を与えた。それによって高度な教育を受けた「新しい女」は、生殖器官が未発達な「おとこ女」で、出来損ないの水頭症の子供を産んで、英国人種を「退化」「消滅」させる存在とみなされたのである。(Ledger 31)

一方のワイルドは、その伝記の中で、彼自身性病に悩まされ続け、直接の死因もこの性病であった可能性が伝えられているし、『ドリアン・グレイの肖像』には確かに、しばしばその記号的な解釈を可能とするような徴が散在していることから、この病気に対する不安のようなものが嗅ぎ取られる。しかしながらワイル

ドの場合は、優生学の観点から再生産の問題に特化するというよりはむしろ、ワイルドという人物、衣装、態度、書き物のすべてを包含したワイルドという存在自体、言い換えれば彼自身が自ら商品化しプロデュースしたワイルドという商品こそが、世紀末的な「退化」の記号として流通したという点にこそ、注目すべきだろう。マックス・ノルダウの『退化』の翻訳がロンドンで出版されたのが1895年であったという事情もあってか、彼の書物はしばしば、ワイルド告発の理由を説明する手助けに使われた。たとえば、第二次公判の後の『レノルズ新聞』の記事は、具体的な同性愛行為というよりも、ワイルドに結びつく文学全般が「病んだ時代の病んだ商品の一つ」であり、有害であるとして裁判で問題視されたこと、それゆえ彼の文学における、「デカダントな文明の最悪の特徴」をこそ、ノルダウは彼の書物『退化』の中で詳細に分析しているのだと、センセーショナルに伝えている (Arata 54)。衣装、同性愛、性病などを包含する彼の文学総体としてのダンディズム、ノルダウの言葉を借りれば、ワイルドの「個人的な奇矯」こそが、世紀末を彩る「退化」の印の凝縮であるとみなされたことを、忘れてはならない。

以上のように、ワイルドと「新しい女」は、たとえ同じ言説から生み出された「双子」であるにしても、その各々の表象はかなり異なったものとなっていることが分かるだろう。

注

- 1 この点については、角田論文に詳しい。
- 2 この点については、Nunokawaの著書第6章を参照。
- 3 詳しくは、この劇のクィア性に注目しながら解釈を展開しているElliot論文を参照。
- 4 この点についての詳細は、『New Woman Fiction 選集』の「別冊解説」および『「新しい女」の系譜』を参照。

Bibliography

- Arata, Stephen. *Fictions of Loss in the Victorian fin de siècle*. Cambridge: Cambridge UP, 1996.
- Brake, Laurel. *Subjugated Knowledges: Journalism, Gender & Literature in the Nineteenth Century*. New York: New York UP, 1994.
- Ellmann, Richard. *Oscar Wilde*. Harmondsworth: Penguin Books, 1988.
- Gilbert, Elliot L. "'Tumult of Images': Wilde, Beardsley, and Salome." *Victorian Studies* 26 (Winter 1983).

- Ledger, Sally. "The New Woman and the Crisis of Victorianism." *Cultural Politics at the fin de siècle*. Eds. Sally Ledger and Scott McCracken. Cambridge: Cambridge UP, 1995.
- Mangum, Teresa. "Style Wars of the 1890s: The New Woman and the Decadent." *Transforming Genres: New Approaches to British Fiction of the 1890s*. Eds. Nikki Lee Manos and Meri-Jane Rochelson. London: Macmillan, 1994.
- Nunokawa, Jeff. *Tame Passions of Wilde: The Styles of Manageable Desire*. Princeton, New Jersey: Princeton UP, 2003.
- Showalter, Elaine. *Sexual Anarchy: Gender and Culture at the fin de siècle*. New York: Penguin Books, 1991.
- Wilde, Oscar. *The Major Works*. Oxford: Oxford UP, 2000.
- アン・クラーク・アモール『オスカー・ワイルドの妻』角田信恵訳 彩流社 2000年。
- エレイン・ショウォルター「世紀末の性と文学」富山太佳夫訳『へるめす』1988年7月号。
- メリッサ・ノックス『オスカー・ワイルド』玉井暉訳 青土社 2001年。
- 角田信恵「『女の世界』におけるオスカー・ワイルドの性の政治学—ワイルドが予定した寄稿者たち」『岐阜聖徳学園大学紀要』第43集 2004年。
- 武田美保子『「新しい女」の系譜—ジェンダーの言説と表象』彩流社 2003年。
- 玉井暉／武田美保子「別冊解説」『New Woman Fiction 選集』アティーナ・プレス 2006年。